

私が感銘を受けた宗教家 —— 戒浄上人の思い出 ——

東京都

中村

元 郎

東京大学名誉教授
東京大学名誉教授
東京大学名誉教授



全然無縁の人に深い感銘を与えるというのは、よくよくのことである。それには、感銘を与える側にそれだけの徳が備わっていないなければならないし、また受ける側にそれだけの機根、素質がなければならぬし、また機縁というものも大切である。

わたくしは、少年時代には笹本戒浄上人にも、さらに遡って弁栄聖者にも全く無縁であった。弁栄聖者のことを最初に耳にしたのは、昭和五年か、六年ごろのことであつたと思う。ともかく今からは五十年以上の昔である。第一高等学校で菅虎雄先生のドイツ語の講義の時間のことだつた。菅先生は、ドイツ語だけを教へられた教授であつたが、背広など、一度も着られたことがない。いつも紋付、羽織、袴、足袋、草履のいでたちで講義をされた。椅子の上によつと乗つて、坐つてしまわれる。日本三筆の一人と評されるほどの名筆の書家で、国士であつた。その先生が、講義の途中で、「近年、弁栄という坊さんがおつたが、これが偉かつたで……」と言われたが、心の底から感嘆して言われたことばであるので、わたくしの心に強い印象を残した。ドイツ語の講義と弁栄聖者とは何の関係もないであろうのに、先生の心を動かしたのであつた。第一高等学校の図書館には、弁栄聖者の「お慈悲のたより」などがあつたので、それを借りて読んだことを覚えてゐる。

東京大学で印度哲学科に入つたら、二年先輩に、村山宏氏がおられた。村山さんは秋田県出身と記憶し

ているが、お家が光明会の信徒であり、その話をされるので、ますます引きつけられるようになった。あるときは光明会の書物を求めたいと思つて、小石川水道端の田中木又師のお宅をお訪ねしたこともあつた。細い路を入つて行くと、お宅は崖の上の奥まったところにあり、庭の草木があまり手入れもされず、むしろ静かなゆかしさの感ぜられる情趣、応待にいられた息女らしい方の淑やかなたずまい——なにか平安朝の物語の情景の中にあるような思いがした。書物は絶版で入手できなかったが、失われた日本のゆかしさを感じただけでも、忘れられぬ思い出となつた。

たまたま浅草の松葉町の橋本徳三郎氏方でお集りがあるとのことで、伺つたことがある。二階のぶつ通し大きな部屋に多勢の方々が集まつておられた。その時説法をなさつたのが笹本戒浄上人であつた。正面にかけて光りに照されている阿弥陀如来の御絵図を指しながら、「よく阿弥陀さまを見つめてお念仏を唱えなさい。阿弥陀さまがお姿を現わしてくださいませよ」と言われた。御説法の詳細は忘れてしまつたけれども、慈悲にみちた、温和で、柔かな笹本戒浄上人のお顔を忘れることができない。笹本戒浄上人にお目にかつたのは、その時、ただ一度だけである。それも御法話を伺つただけである。しかし今なお忘れられぬ感銘を残しているのは、ことばでは一々表現することのできない御高德のゆえであろう。あのような方が、本当の宗教家ではないかと思う。最近になつて知つたことであるが、大正大学助教授佐藤良純師は、笹本戒浄上人の令孫に当られるとのことで、上人がますますお親しく感ぜられ、なにも過去の方ではなくて、今なお生きていらつしやるような身近な方のように思われる。